球磨絵図写

人吉の美術工芸・学芸

七七　男乗物・女乗物

江戸時代末期

相良神社所蔵

江戸時代、引戸のある駕籠を高級化したものを「乗物」と称し、通常の駕籠とは区別した。江戸幕府は「武家諸法度」により公家・門跡（上級僧侶）・国持大名など、限られた身分の者にだけ乗物の使用を許していた。

本男乗物は三十五代の相良頼基が使用していたとみられる。屋根・引戸・敷居は黒漆塗仕上げで、前後は畳張りの質素な造りとなっている。

一方、女乗物は慶應二年に頼基に輿入れした京都徳大寺公純の娘である中姫が持参した乗物である。朱漆塗りで、金具は金メッキされ、家紋や梅・竹の紋などの金蒔絵を散らし、内部は大和絵を描いているなど、精巧、華麗なものである。

七八～八一　槍身

江戸時代

人吉市教育委員会所蔵

七八　刃長一七八ミリ、茎長三二〇ミリ
目釘穴一ヶ　直刃
表銘「武州於江戸越前之肥後国求麻住
下坂大膳正藤原継貞」
裏銘「康継入道弟子也正保四年八月吉日」
※熊本県指定重要文化財

七九　刃長一七八ミリ　茎長三一七ミリ
目釘穴一ヶ　直刃
表銘「肥後国求麻住下坂大膳正藤原継貞」
裏銘「正保四年八月吉日」

八〇　刃長一八六ミリ　茎長二九一ミリ
目釘穴一ヶ　直刃
銘「一顧伝四郎」

八一　刃長一七〇ミリ　茎長二九五ミリ
目釘穴一ヶ　直刃
銘「（恒松）久六」

八二～八四　長柄

江戸時代

相良神社所蔵

参勤交代において使用されたと考えられる長柄（槍の柄）である。いずれも先端に螺鈿の装飾を施し、槍身は木製で実用を離れた威儀用の品として製作されている。

八五　刀

人吉市教育委員会所蔵

刀身六七八ミリ
反り一八ミリ　目釘穴一ヶ
表銘　「於東肥熊府加藤長運斎綱俊」
裏銘　「嘉永三歳十二月吉日　稲田久長　川島義次」
※運寿久長は相良家のお抱え鍛冶師で二人扶持。江戸で石堂是一の弟子となり、修行後人吉に帰り鍛刀した。

八六　刀

人吉市教育委員会所蔵

刀身七〇六ミリ　茎二〇四ミリ
反り一一ミリ　目釘穴一ヶ
銘　「人吉住大道」
※作者の大道は、人吉藩の鍛冶職で南泉田に住んでいた。

八七　脇差

江戸時代前期
人吉市教育委員会所蔵

刀身長四九二ミリ　茎長一五〇ミリ
反り一六ミリ　目釘穴二ヶ
銘　「肥後国求麻住　下坂継貞」

八八　太刀拵

江戸時代
人吉市教育委員会所蔵

相良家定紋金据物朱鞘

八九　脇差拵

江戸時代
人吉市教育委員会所蔵

相良家定紋金据物朱鞘

九〇～九七　鍔

江戸時代
人吉市教育委員会所蔵

九〇　鉄地蜻蛉透銀覆輪鍔
銘　「人吉臣明珍紀保次」
九一　鉄地亀甲紋鍔
銘　「人吉臣明珍紀保次」
九二　鉄地唐草紋鍔
銘　「明珍門紀保次」
九三　鉄地桐紋象嵌鍔
銘　「人吉住重郷」
九四　鉄地亀甲紋蛇目・扇紋散鍔
銘　「明珍宗保門下保次」
九五　鉄地亀甲紋猪目透鍔
銘　「人吉住明珍保次」
九六　鉄地葡萄紋金象嵌鍔
銘　「人吉　明珍保次」
九七　鉄地猪目透鍔
銘　「人吉住　紀　保通」

90

91

92

93

94

95

96

97

九八　刀拵金具

江戸時代
人吉市教育委員会所蔵

四分一金象嵌揃金具
銘「肥後人吉藤　資春（花押）」

98

九九　小柄・笄

江戸時代
人吉市教育委員会所蔵

小柄長一〇〇ミリ、笄長一九八ミリ
相良家定紋・桐紋金具付き
銘「柘植吉勝」

99

一〇〇　小刀

江戸時代
人吉市教育委員会所蔵

刃長九二ミリ
銘「人吉住景一造」

一〇一　小刀

江戸時代
人吉市教育委員会所蔵

刃長九〇ミリ
銘「人吉住運寿景一」

一〇二　火縄銃

江戸時代
人吉市教育委員会所蔵

全長一三六八ミリ
銃身長一〇六四ミリ
口径　一一ミリ
相良家御紋据物
銘「薩摩住　實函」

一〇三　火縄銃及び火縄、銃弾、火薬入

江戸時代
佐無田　護氏所蔵

全長一四八八ミリ　銃身長一一三三ミリ
口径　一二ミリ
水草に鷺図銀象嵌
表銘「元巻」
裏銘「摂劦住井上関右衛門作」

一〇四　黒漆塗紺糸威胴丸具足

江戸時代
人吉市立西小学校所蔵

相良家から人吉市立西小学校に寄贈された甲冑である。金属をほとんど用いずに軽量化を図っている。元禄以降に流行する実用を無視した飾り具足の一例とみられる。眉庇と吹返しに相良家定紋の剣梅紋の据物が付けられている。

一〇五　蒙古風形相良家紋入兜

安政三年（一八五六）
人吉市教育委員会所蔵

銘「明珍　宗周作」

一〇六　桃実形蜻蛉金象嵌兜

江戸時代

人吉市教育委員会所蔵

銘「明珍　紀　保次作」

一〇七　木製黒漆塗相良家定紋金具文箱

江戸時代

人吉市教育委員会所蔵

縦四二一ミリ　横一〇ミリ　高五五ミリ

一〇八　木製漆塗相良家定紋入水指・椀

江戸時代

願成寺所蔵

一〇九　玄高（長毎）様発句掛物

江戸時代

人吉市教育委員会

一一〇　細井平洲作山水画その一

江戸時代

人吉市教育委員会所蔵

一一一　細井平洲作山水画その二

江戸時代

人吉市教育委員会所蔵

一一二　細井平洲作山水画その三

江戸時代

人吉市教育委員会所蔵

一一三　細井平洲作山水画その四

江戸時代

人吉市教育委員会所蔵

一一四　細井平洲作書跡（詩書）

江戸時代寛政年間頃

人吉市教育委員会所蔵

「玉樹花開内殿春趙家軽妙舞衣新
三千富貴連房以誰比君恩財一身」

「平洲紀徳民」

一一五　佐藤一斎書跡

江戸時代

人吉市教育委員会所蔵

「陽氣發処金石亦透
精神一到何事不成」

「八十二叟　一斎藤担書」

一一六　佐藤一斎書跡

江戸時代

人吉市教育委員会所蔵

「花明山下路　竹暗水邊居
道人眠不起　春澗鹿相呼」

「影山居園　八十七叟　一斎藤担書」

一一七　佐藤一斎書跡

江戸時代

人吉市教育委員会所蔵

「心作良田國　世耕之不寒
善為玉寶　一生用之有餘」

「一斎老人藤担書」

一一八　時の太鼓

江戸時代

人吉市立西小学校所蔵

相良家から西小学校に寄贈された胴長太鼓で、欅の一木造り、面径八五〇ミリである。

寛文十年（一六七〇）に船場（現在の下新町）の無量寿院から人吉城本丸の太鼓屋に移され、時を知らせることになる。太鼓番は、本丸にあった山伏番所にいた山伏が受け持っていた。